

宮川ひろの未発表作品「春駒」について

—— 解題と本文紹介(二) ——

中* 地*
大** 木 葉 子 文

要旨

日本の現代児童文学作家宮川ひろは、代表作『春駒のうた』刊行以前に、同じ題材での試作を繰り返したと語っている。今回、『春駒のうた』につながる初期の作品とみられる未発表作品「春駒」の原稿を確認する機会を得た。これは、宮川ひろのご子息宮川健郎氏が保管しているものである。本稿では、未発表作品「春駒」について、宮川ひろ自身の発言と現存稿の状態とを確認したうえで、原稿全一二三三枚中六六枚目まで(作品第二章まで)の本文紹介を行うとともに、推敲過程を明らかにした。

キーワード… 宮川ひろ、児童文学、「春駒」、「春駒のうた」

一 宮川ひろと「春駒」

宮川ひろ(一九三三〜二〇一八)は、デビュー作『るすばん先生』(ポプラ社、一九六九年)、代表作『先生のつうしんぼ』(偕成社、一九七六年)、『天使のいる教室』(童心社、一九九六年)などで知られる現代児童文学作家である。小学校を主な舞台として子どもの学びや遊び、心情を描いたその作品は、子どもと教員たちに支持され、多くの読者を獲得した。現在でも、『しばいにかんぱい!』(童心社、二〇〇八年)をはじめとする「かんぱい!シリーズ」は、子どもたちに読み継がれている。しかし、ひろが心から書いたと思っていたのは、故郷である群馬の山村を舞台とする『春駒のうた』(偕成社、一九七一年)だったのだという。エッセイ『春駒のうた』によせて「

〔児童文芸〕一九八六年十一月)には、「書きたいと願っていたのはこの一作だけでした」とある。さらに、日本児童文学者協会編『作家が語る わたしの児童文学15人』(につけん教育出版社、二〇〇二年)所収の『春駒のうた』の宮川ひろさん(談)では、次のように述べている。

書くことに出会ったとき「春駒」を書きたいとそれだけを思いました。でも、どうしても作品になるのかわからないままに、書いてはしまいこみ、書いてはあきらめて、本にしてもらったのは四作め。ずいぶんあとで、ようやく偕成社から本になりました。

ここで宮川ひろは、『春駒のうた』刊行以前に、同じ題材で試

* 宮城教育大学 教科内容学域 人文・社会科学部門(国文学)

** 東北工業大学

作を繰り返したと語っている。同人誌『どうわ教室』創刊号（一九六六年四月）に発表された「春駒」は、その試作の一つと考えられよう。また、ひろの長男で日本児童文学研究者である宮川健郎氏によると、『どうわ教室』掲載の「春駒」よりも前に、別の「春駒」をひろは書いていたという。宮川健郎氏には、昨年、宮川ひろの児童文学と教育との関わりに関してインタビューをしたが、その中で未発表草稿「春駒」が現存すること、これは「最晩年に出てきたもの」で「原稿用紙約二〇〇枚に清書され」紐で綴じられた形で残されて「いることを伺った」^①。今回、宮川ひろの最初の創作とみられる未発表草稿「春駒」を、宮川健郎氏のご厚意によって拝見する機会を得た。

この草稿「春駒」に関して、宮川ひろ自身は、前掲『春駒のうた』の宮川ひろさん（談）^②で、壺井栄の『二十四の瞳』（光文社、一九五二年）を読んで感銘を受け、自分の中にも同じような物語があると思つて執筆したと語っている。

『二十四の瞳』（光文社、52年）の刊行は、新聞広告で知りました。そのころ、新刊書を買って買っ暮らさしなどしていなかったのに、どうして求めたくなったのか……。多分この本の紹介に、岬の分校を舞台にくりひろげられる話とあつたことから、山の分校育ちのわたしは読んでみたくなつたのでしょうか。池袋の本屋さんで買ったことを覚えています。この作品はとても読みやすく、読書力のないわたしにも一気に読めました。深い感動はテーマやストーリーというより、作品の中にいる人々が、そのままわたしのふるさとの人々だったからでした。

（中略）

こういう話ならわたしの中にもあります。そう思つたわたしは原稿用紙を買つてくると、綴り方を書くように、二百枚ほどのものを一気に書きあげました。

このようにして書きあげた原稿を壺井栄に見てもらおうと思ひ、『二十四の瞳』の巻末に載つていた住所にあてて「わたしも書いてみたのですが、見ていただけるでしょうか」と依頼の手紙を送つたと、『春駒のうた』の宮川ひろさん（談）^③での説明は続く。壺井栄からは、「二十日以上も過ぎたころ」「おいとわりのおはがき」が届き、結局「原稿はそのまま戸棚の奥へしまい

こ」んで、「それつきりあきらめてしまった」という。この説明にある壺井栄から届いた葉書は、現在宮川家に保管されており、今回、それも確認させていただいた。消印は、「湯田中／2989/06」、一九五四年八月九日に長野県の湯田中で投函されたものである。「二十日以上も過ぎたころ」に届いたということは、宮川ひろが壺井栄に手紙を出したのは一九五四（昭和二九）年の七月中旬と考えてよいだろう。

宮川ひろが草稿「春駒」について語っているのは、このほかには東京都豊島区が企画・制作した映像作品『坪田譲治との出会いからはじまった宮川ひろの作家人生』（豊島区、二〇二〇年）に収録されたインタビューにおいてである。この映像作品には、「春駒」の原稿や壺井栄からの葉書の画像が登場するが、執筆経緯等をめぐる情報は、『春駒のうた』の宮川ひろさん（談）^④とほぼ同じといえる。草稿「春駒」の執筆時期について、『春駒のうた』の宮川ひろさん（談）^⑤でも『坪田譲治との出会いからはじまった宮川ひろの作家人生』でも、『二十四の瞳』を読んだ直後に一気に書きあげたと語られている。そうしてみると、習作「春駒」第一稿執筆は、一九五二年十二月の『二十四の瞳』刊行から数ヶ月経つか経たないかという頃であり、一九五三年の初めとなるだろう。その後、壺井栄に手紙を出したのが翌一九五四年の七月中旬だとすると、一年以上の時間をかけて現存する清書稿を整えたということだろうか。「春駒」には「国語読本 巻七」の引用などがあるが、引用のための調査などを行ったのも、その一年の間なのだろうか。執筆の時期については、今後、内容の精査を行いながら検討していきたい。

内容の検討に先立って、今回は原稿管理者の宮川健郎氏のご許可を得て、本文と推敲過程の紹介を行う。原稿の状態と、本文紹介の方針を示したうえで、最終形態の本文を提示し、そのあとに原稿から読み解いた推敲過程を記す。宮川健郎氏には、本文と推敲過程の紹介についてご許可をいただいていただけでなく、何度も原稿を確認させていただくなど、一方ならずお世話になつた。厚く御礼申し上げます。

なお、紙幅の都合で、今回は原稿の前半の紹介となる。

二 「春駒」の原稿の状態と、本文紹介の方針について

宮川ひろの未発表草稿「春駒」は、ひろの長男で著作権管理者である宮川健郎氏の自宅に、ひろが生前に整理した形で保管されている。現存稿は、B4版の原稿用紙一三三枚。一枚ずつ二つ折りにされたうえで重ねられ、黒い綴じ紐で綴じられているが、経年劣化で、一枚目は綴じ紐から外れてしまっている。原稿用紙は茶色の罫で、左側下欄外に「20×20」と入っている。そのほかに製作者の記載等はない。

現存稿の最初の一枚は、表紙で、原稿用紙右半分の中央に「春駒」というタイトルが記され、その左下に「北区西ヶ原三の六〇／宮川ひろ子」と書かれている。二枚目は「梗概」。三五〇字程度にまとめてある。三枚目は「目次」。原稿用紙右半分に全九章からなる目次が記されている。この三枚にはページはふられていない。

四枚目からが作品本文で、原稿用紙右側の上欄外の「No」記入欄に、四枚目を「No.1」として、以下一三三枚目までページがふられている。原稿用紙左側の上欄外の「No」記入欄には何も記載はなく、原稿用紙一枚を一ページとして、右側上欄外にだけページ番号を入れている、という形である。最後の「一三三枚目は、「No.130」となっている。

なお、原稿用紙二枚目の「目次」の最後には、「九、揃いの単衣 二二四―二三九」とあり、「二二四―二三九」はページ数とみられることから、「春駒」はもともと全二三九ページの作品であったと推察される。しかし、現存稿は一三〇ページまでで、目次の「五、母の死 一一七―一三二」が終わる手前で途切れている。最後は「でもね余りにも貧乏過ぎる」と一文の途中で終わっていて、原稿の束を分けて綴じたと考えられるにしても、前半をここまでとするのは不自然である。「五、母の死 一一七―一三二」までの清書稿をまとめた束から、最後の二枚が抜け落ちてしまったのだろうか。現在のところ、その経緯を判断する手がかりは見出せていない。また、清書稿の後半が別に綴じられて存在していたのかどうかもわからない。とはいえ、宮川ひろが「二百枚ほどのもの」(前掲『春駒のうた』の宮川ひろさん(談))を書いたと説明していることを踏まえれば、少なくとも清書稿の前の段階で

は原稿用紙二三九枚あった、だから目次に「二三九」と記した、と考えるのが妥当だろう。では、なぜ一三〇ページまでが綴じられて保管されているのか。また、なぜそれ以降は一緒に保管されていないのか。この問題についても、今後、内容を検討しながら考えてみることにする。

今回は、「表紙」「梗概」「目次」と、第一章「春駒」(原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.1」から「No.22」まで)、第二章「木村先生」(同「No.23」から「No.63」まで)の本文紹介を行う。本文は、推敲の最終段階を示すことにするが、本文決定にあたっては次の方針を取ることにした。

- (1) 本文の表記、仮名遣い等は、原則として原文通りとする。
- (2) 漢字は、原稿では正字・俗字、旧漢字・新漢字が混用されているが、意図的な使い分けと判断できる場合を除いて、常用漢字の字体に統一する。
- (3) 誤字・脱字等は、ママと注記してそのまま記す。昭和初期の慣用表記と考えられるなど、必ずしも誤りとはいえないものも、用字・表記が今日の通常のものとは異なる場合は、ママと注記して記す。
- (4) 拗促音は、原稿では使用に不統一が見られるが、意図して使い分けられていると考えられる場合を除いて、小書きに統一する。
- (5) 送り仮名は作者の記した通りとする。
- (6) 句読点は、原則として原文通りとするが、書き癖により句点か読点か不明確なものについては文脈にそくして判断して記す。
- (7) 改行、字下げ、一字あけ、傍点等の指定は、原則として原文通りとする。会話文の字下げに不統一が見られるが、統一しなかった。
- (8) ルビは、作者自身が付したものを、付した通りに示す。

三 未発表草稿「春駒」の本文紹介(一)

春駒

北区西ヶ原三の六〇

宮川ひろ子

梗概

冬の長い上越国境の山村に春は春駒の太鼓の音のつて訪れる。そんな村に育った貞治と雪子は仲のいい兄妹である。

貞治が通う部落の分教場へ町から赴任して来た木村先生は若く美しかった。児童愛に燃えて教育の理想を押し進める木村先生は村人に容れられず遂に分教場を追はれ、世の中のむつかしさを怒り悲しむ。

木村先生と雪子は震災の時別れた姉妹だったのだけれど二人はそれを知らず雪子は不思議に木村先生をしたう。そして教員になりたいという雪子に師範学校へ入ることを勧めたが雪子はその寮生活に耐えられなくて発病して家に帰る。その妹を常にいたわる貞治も召集令を受けて出征し北支で戦死する。残された人々の心は悲しみに震え若い生命を奪う戦争の恐ろしさを叫ぶ。

目次

一、春 駒	一——二二
二、木村先生	二三——六三
三、誕生	六四——九一
四、運動会	九二——一一六
五、母の死	一一七——一三二
六、将来の希望	一三三——一四七
七、師範学校	一四八——一八九
八、貞治の出征	一九〇——二二三
九、揃いの単衣	二二四——二三九

春駒

小さな村を囲む重なり合った山々の木立は未だかたくその芽を閉じたままだけれどその梢は寒風と闘って来たうなりを静めて、落葉の下に隠された山肌はしっとり濡れていたし部落の家並を二つに分けて流れる谷川の水も濁って水量を増し流れに添った街道のぬかるみも知らぬ間に乾いて自然も人も救はれた様にホット歎息しているのかと思はれる物静な午後。それは昭和

四年の四月の声を聞いたばかりの暖かい日だった。冬の長い上越国境のこの山村にも待ち詫びた春が漸く訪れて家々では黄色く煤けた障子を明け放って深い藁葺きの軒から射し込む太陽の熱と光を貪っていた。西陽の射す緑側に長々と寝て両手の肘を突いて頬を支えた姿勢で本を読んでいる貞治とそのま兄の姿勢を真似ている雪子の傍に継ぎ物に余念のない母親も常にも似ず兄妹のそんなお行儀をたしなめることさえ忘れていた。半年に近い冬の間燃え続けて絶えたことのなかった囲炉裏の火の消えたのも知らぬ様子である。

「あ、おっ母とつてもいいにおいがするよ」

突然座り直して言う貞治の声に弾かれた様に起き上った雪子も針先から眼を離した母親も

「びっくりするじゃあないか」

「たまげた」

と何事が起ったのかと視線を向けると今まで読んでいた本を両手に持って低く開いた鼻の頭に押しつける様にし乍らクンクンと小鼻を動かしている。

「ほらな 雪子」

本は雪子の鼻に近付けられお母さんの顔にも押しつけられた。

「ほんとだ」

感心している母と妹の前でもう一度その臭いを確める様に鼻をクンクンさせた貞治の眼は輝やきを増して

「あ、こりゃあ新しい臭いだよ ムシおっ母。」

その本は貞治が優等で四年生に進級した賞品として三月末の免状式の日に学校から戴いて来た、国語読本 巻七の教科書なのである。その臭いが何の臭いであるかを二人の子供に納得出来る様に説明する言葉に困っていた小学校二年だけで退ってしまったという無学の母親は貞治の言葉に嬉しくなつて

「うん新しい臭いだよ。その臭いがいつまでもとれない様に大事にしなければだめだよ」

と教えた。

「おっ母 四年になるとずい分むずかしくなるよ。ほら字だってこんなに小

さくなるし 絵なんかあんまりねえもんな」。

そう言い乍ら得意そうにパラパラッと全体をめぐって見せた。

「そんなにむずかしくなくても読めるかな」
再び針を動かして乍ら母親は眼だけは貞治の顔に向けていた。

「読めなくてどうなるもんか」

咳払いを二つした貞治は起ち上って教室で読む時と同じ様に両手を伸ばして本を持つと

「第一 世界 地球の上には海と陸とありて海の広さはおよそ陸の二倍半なり。海を分けて太平洋、大西洋、印度洋とし、陸を分けてアジア洲、ヨーロッパ 北アメリカ洲、南アメリカ洲 アフリカ洲 大洋洲とす」

と高らかに朗読をはじめた。はじめて出て来た文語体をすらすらと読みこなせた喜びは成長の喜びでもあった。一字一句も誤らず読もうとする真剣な眼と口許を見上げていた母は縫物は膝から下してしまつてうなる様に

「ウームよく読めた読めた」。

と感心すれば妹の雪子までが

「貞兄は級長さんだものなあ」

とほめ上げるので少し恥づかしそうに腰を下すと

「雪子だつてとつても上手読めるよな 読んで見ろ」。

雪子は就学までには未だ一年間ある数え年七才だったけれど勉強好きな貞兄の側でお古の一年生の教科書を持つて、もう空んじるほどによく読んでいた。

「だつてハナ ハトはあきちゃったもの」

「それじゃあな アメガヤミマシタからでいいよ」

「うんそれじゃ読むよ」

雪子も貞兄の読んだ時の様に姿勢を正した時だった。風も止み、小鳥のさえずりもなくなった程静だった村のはずれから、トントントントントーン、トントントントーンとかすかに太鼓の音が聞えて来た。

「あ、春駒だ」

貞治がそう叫んだのと縁側の沓脱の上に脱いであった長靴に足を入れたのが同時だった。

「貞兄、待ってて」

もう本を読むどころではなかった。兄さんに先に行かれては大変と半分泣き声を出し乍ら小さな長靴を履くのが忙しい雪子。

早く早くとせきたて乍らも妹の手を引いて街道へ駆け出して行く二人の後へ母親は笑い乍ら

「貞治も雪子もその靴で行くのかい」

と声を掛けておいて土間へ降りると高い天井にずらつと並べて掛けてある藁草履を棒を伸してはずしてくれていた。

「あ、そうだ。雪子、ぞうり、ぞうり」

心は太鼓の音の方へはやるけれど引き返して来て藁草履に履きかえると急に軽くなった足を高くあげて太鼓の音の聞える方へと走って行った。新しい藁草履もやっぱり新しい臭いがしたのだけれど此の時の貞治には感じられる筈もなくお母さんだけが

「新しい藁草履の臭いは春の臭いがするよ」

と一人でつぶやいていた。

上越線N駅から東へ六里片品川に添った幾つもの山を越えた小さな部落は養蚕と馬とそれに僅かばかりの段々畠を耕し冬は山の木を炭に焼いて生活している村だったから、蚕がよい繭を作り仔馬が丈夫に育たなかつたら大変なことになるのであるが生物である蚕も馬も病気をすることのあることを恐れ乍らも獣医もいなければ消毒薬もない現状を打開しようとするでもない、いやしようとしても先に立つお金のことを考えたと行き詰つてしまつて祈禱師がつくってくれるお・へい・そくを拜んでは心を安め、唯一の財産であった馬が病死してしまつても四眠を過ぎた蚕が一夜の中にコシヤリ（白く硬化して死ぬ）になつてしまつて種子代さえ払うことが出来ない時でも

「運が悪かっただよ」

と泣いて諦らめ

「仕方ねえことになつてしまつたつてなあ」

と口では慰め乍らも他人の不幸は隣の貧乏鶴の味として喜び隣人だったから力を合はせて打開の道を樹てることもなされないのだ。そんな風だったから春の訪れと共に隣村からやつて来て今の年も蚕も馬も丈夫に育ちます様に併せて五穀豊穰、家内安全を招くという春駒は何処の家でも鄭重に迎えられる御札の麦を奮発することによって今年の繭の収穫と仔馬の売値に希望を掛けるのだった。春駒が家々を廻つて歩く様になつたのは何時の頃から始めら

れたのかは知らないけれど其の歌声は長い冬にいたためつけられて来た村人の心に暖い春の訪れを知らせてくれる希望の歌声でもあったから

「春駒が来たか、それじゃあもう雪も降るまいよ」

と人々は喜んで春駒の太鼓の音を聞いた日から冬中履き続けた重い長靴を脱いで雪の日に作っておいた軽い草履にはき替える習慣にもなっていたのだ。

トントンと歌声と共に桑の木の枝で鳴らす平太鼓の音は二、三軒先まで近付いて来た様子でその後をぞろぞろとついて歩く子供達の声も賑やかに聞えて来る

「どれ麦でも出して来ておくかな」

と一人言を言い乍ら貞治のお母さんも物置へ行こうとした時急に駆け込んで来た貞治はハアハアと荒い息をはき乍ら

「おつ母、おつ母よう」

とその次の言葉は続けられない程慌てて

「おらが家じゃあ麦をどれだけやるだい」

と心配そうに問うのに何だそんなことかと言った風に

「五合っていうわけにもいくめいから平に一升も出すべいよ」

言い乍ら物置へ姿を消してしまったので後を追って直ぐには物の見分けもつかない様な暗い物置へ貞治もはいつて行って

「ムシおつ母山盛一升にしてその上へ錢包ゼニんだのをのつけてやるの駄目かい」

「貞は何言うだ おらが家あたりでそんなことをしたら皆に笑いものにされるがな」

「それだつて 高夫んとこそうしただもの。だから春駒が長く唱って棒までお盆に行つたつて高夫の野郎いばつてるだよ」

お盆にのせた一升斛の麦が山盛だと長く唱い錢が上げてあつたら其の家の庭の桑の枝と太鼓の棒とは取り替えられその棒は神棚へ上げて拝まれるのである。

「高夫んとこなんか百貫蚕をする家だし、おらのとこじゃあ蚕も飼はなけりやあ馬もいねえ半百姓だもの、そんな家の真似したらおかしいじゃあねえか」

「それだつて鼻たらしのくせにいばるだもの」

「そんなことをくやしがる子はおかしいよ。貞が大きくなつたら錢も包める様な大百姓になつてくれよ。ほれ、もう春駒が来てしまふじゃないか」と追はれる様にして物置から出て来た貞治は渋々と納得出来ない様子だった。その時太鼓の音は門口近くまで来て

とび込め、はねこめ、蚕飼いの三吉

と威勢のいい高い声で一丈程の派手な模様メリンスの布を両手に掛け右手には木で造った馬の首を持って右に左に振り乍ら十七、八才位の娘さんが唱うと太鼓をたたき乍らお母さんらしい人が低く唱う

春の始めの春駒なんぞ

夢に見てさえよいとや申す

一羽はけば一千枚の蚕

二羽根はけば二千枚の蚕――

節面白く唱う春駒を取巻く子供の先頭に高夫は袖口で鼻をこすり乍ら平に盛られた麦の斛をじつと見ていた。

歌声は家から家へ太鼓の音も次第に遠く母娘春駒は村をはずれお共に疲れた子供達も村境の橋を区切りに帰つて来た

「春駒しようか」

お盆と箸を持ち出す貞治

「うんしよう」

と赤い兵子帯を両手に掛けた雪子は器用に振り乍らソプラノで唱えば貞治が低く之に和して兄妹春駒は家の中一ぱいに福の神をまき散らす。暮色のせまって来た部落の三本辻の辺からも歌声と笑う声と泣く声とが一頻り聞えて来た。

「晩方になると未だやつぱり凍みるなあ。それ貞は早く雨戸を開めて薪を入れないきゃあ空っぽだぜ」

忙がし気にいろりの火を炊き付けている母親は今年の種蒔きの計画でもたてているのか何事かを真剣に考えているらしい顔が燃え上る炎の明るさの中に映し出されていた。土間の傍に置かれた大きな薪箱の中にはそのままでは燃えそくもない程太い桑の木の根っこが一つ転がっているだけだった。

「雪子はボヤ入れてくれ」

「うん」

唱い疲れた兄妹は仲よく庭先の薪小屋から一抱えずつ兄は重い薪を妹は軽いボヤ（そだ）を運び入れるとそのままよく乾いていそう一本をくべ足して

「一燃し燃さなけりやあ寒いや」

そう言ひ乍らほのおの近くまで持つていって温めた手で耳をこすつては又温めていゝ。

自在鉤に掛けてあつた鉄瓶がチンチンと音をたてて煮たつたのを雑布で熱く

なつた釣（つり）を持つてお母さんは下し乍ら

「はあお父つあんも帰つて来べいから貞煮メの鍋を持つて来て掛けてくりやい」

「はい」

と貞治は勝手元から大きな鉄鍋を両手で持つて前に下げると歩きにくそうにヨチヨチ運んで来るのを

「あれまあだそんなに重ていか」

受け取つて釣に掛けると蓋を取つて木のおたまでかき廻した。塩鮭の頭をだしに入れて大根やじゃが薯を大きく切つて昨日作つた煮メは未だ鍋に半分以上も残つていた。

「お父つあん遅いな」

「腹がへっちゃつたなあ」

あたたまつて来た煮メの臭いに食欲をかきたてられて兄妹が空腹を訴えた時表に足音がしてお父さんが帰つた様子である。貞治のお父さんは背負い呉服の行商人である。小さな村では自分の村は勿論のこと隣り村までも誰の家にはどんな人がいて近く赤ん坊が生れるとか嫁入りするなど詳しくわかつていゝから、そうした家を目当てにして品物を仕入れて来ては売つて歩き種蒔きや取り入れなどの忙しい時には百姓を手伝つて生計を樹てゐる家なのである。

「ハイただ今」

「おかえんなさあい」

節をつけて賑やかに迎え入れる兄妹ははじめられた様に炉端を離れて大きな荷物を手伝つて下してやろうとするのだった。

「やれやれ今日はぬつかつたなあ」

重い荷物を背負つて歩いて来た父親は額ににじみ出た汗をふき乍ら言えば

「だつて今日は春駒が来ただもの」

「今日つから春だもんな」

「そうかやつと春駒が来たか。今年はいつともより遅かつたんじゃあねえか」

「ああ、彼岸になつてまでも雪が降つていて春駒の出て来る陽気になれなかつたから」

グツグツと煮メの煮えている四角な炉を四人で囲むと先づ一服と腰から取出した煙草に火をつけながら

「来年春駒が来る時には貞は五年になつて本校だし雪子も学校だなあ」

成長した二人の子供を見比べる様にして父親が言えば

「今年は豆の一俵も余計とつて来春は貞の洋服と雪子の袴を買つてやるべえな」

さつきから考えていたらしいお母さんは大豆の収穫に希望をかけて皮算用をしていたのである。山の間の流れにそつて百戸位づつかたまつてゐる部落が八つ集つて一つの村をなしてゐる此の村では役場や学校のある中心の部落へ出る為には一里近くも林の中の道を歩かなければならなかつたから四年生までは分教場へゆき、五年生から本校へ通うのだけれど、分教場に行つてゐる間は昼食も食べに帰れたしツギの当つた着物でもよかつたけれど本校へ行くようになったら服装も履き物も弁当まで少しはましなものをと考えるのが親心だった。未だ洋服というのが流行りたてでほんの二、三の子供が着てゐるだけだったし、女の子でも四大節の式の時にも袴をつけてゐる者は少ないのだが、学校の出来のいい貞治にもあの何となくこうそうに見える洋服と着せてみたいのが母親の願ひなのである。

「おらア洋服なんかより一度町へ行って見ていよ。乗合自動車にだつて一度も乗つたことがねえし、汽車なんて見たこともねえだもの」

「よし それじゃあ来年総代になれたらほうびに町へ連れてつてやるべえよ」

「ほんとかい ほんとかい」

父親の側へいざり寄る様にして二度も念をおす貞治には総代になれる自信が

大いにあるらしく引きしめた口許が「ならなくってどうなるもんか」と言いたげである。空腹も忘れて来年の希望を賑やかに話し合っている父母と兄の会話の中へ一言もはいつて来ない雪子は赤く燃える火の一点をじっと見つめて大人の様に何か考えておし黙っている。はじめて気がついたお母さんが「雪も一諸に町へ連れてつてもらつてな赤いカバンを買つてもらうだよ。」とりなす様に言う。

「おら学校なんて行かねえもの、学校なんてきれえだもの」

母の膝近くすり寄つて来て言う雪子は涙さえ浮べているではないか。驚いてその肩を優しく抱いてやり乍ら

「あれ どうしてそんなことを言うだよ」

「学校がきれいだなんて馬鹿の子が言うことだよ」

なだめる様にすかさずにみんなで言えば

「あんなおつかない先生のいる学校へ行くのなんかいやだ いやだ」 小さな身体をふるはせて泣き出してしまった雪子。

それは昨年の暮れ近く此の年になってはじめて雪らしい雪の降る日だった。此の分教場には小使いさんがいなくても五十を越した男の先生が一人だけだったから十二月から三月まで教室や職員室に火を置かねばならない冬の間だけ母親が当番制で一日交替に小使いさんの仕事をするのがならはしになっていった。当番の日には一人では未だ留守番の出来ない雪子もお供になって学校へ行っていたのだが、半年近くも雪の中に暮していながらもその冬にはじめて積った朝からの雪に子供達は大はしゃぎで犬ころの様に運動場をはね廻っていた。見る見る五、六糶も積った雪は道も枯枝も総べてを白一色にぬりつぶして綿の様な弾力を感じさせる新しい雪の上を子供でなくてもはね廻つてみたい気持ちにさせる程美しく後から後から降つて来ては積った。やがて始業の合図の笛がなつてみんな教室へはいつて一瞬静になった時あたふたと一坪もある大きないろりのある小使室へ駆け込んで来た徳一は

「小母さん炭の粉をちつとくだいよ」

とこととはと許しも待たずに炭箱へ手を入れて外で作つて来たのであろう片手の上のせられる程の可愛い雪だるまに眼と口をつけはじめた。じっと見ている雪子は

「いいな あんなかわいいの」言い乍ら側へ寄つて行くと

「ほしいか？ それじゃあ今度の休み時間にもう一つこしらえたら上げるよな」

顔をつくり乍らも始まっている教室の方が心配になるらしく大急ぎで懐にしまつと足音をしのばせる様にして教室へ続く廊下を走つて行つた。そつと教室の戸を開けて入ると

「今まで何をしていただ!!」

大きな声でどなられたけれどそれ以上は何も言はれなかったので救はれた様に席へ着くと教科書を出して屏風の様なたて、その陰に懐の雪だるまを出してそつと置いた徳一には先生の話も答えている友達の声も聞えず小さな雪だるまだけが嬉しくてならなかったのだ。

「大馬鹿者めが」

大きな声に驚いて顔をあげた時には先生がもう側に来て立っていられたからどうにもならなかった

「それを持って外へ出る」

命令は絶対だった。引ずられる様にして外へ出された徳一は二つ三つ平手で打たれたがよろよろし乍らも雪だるまは離さなかった。するとその手からもぎ取る様にして取上げると雪の中へ力一ぱい投げつけたからたまらない雪だるまはびしゃと音がしてつぶれた。物音に驚いて小使室から出て来た雪子は母の陰にかくれてどうなるのかと見ていたが雪だるまのつぶれたのを見るとわつと泣き出した。徳一も誘はれた様にシク／＼と泣き出したが先生はむつかしい表情のまままで教室へ引き返されるのを後を追つて行つて母が詫びてやつと徳一は許されたのだった。折角作つた可愛い雪だるまを投げつけてしまつて程何で怒られねばならなかったのか雪子にはわからなかったのだ。それにあんな恐ろしい顔を一度も見たことのない雪子には先生とは怖い者、学校とは恐ろしい処という印象が深く刻まれたままで、どうしても学校へ行かなければならないのだろうかという不安は其の日から小さな胸を塞ぐ大きな悩みだったに違いない

「悪いことをしなけりゃあ先生だつてお叱りにはならないだよ それに今年 は中村先生はお退りになつて若い女の先生が来られるつていう話だよ」

先生が代る、そんなことがあるのだったのかはじめて聞いた雪子は泣くのを止めて顔を挙げると

「女の先生って優しいかい」

母の顔を見つめた雪子の眼は真剣に聞いていた。

「優しいとも」

三人の声が一語に答えた。その後で、

「女の先生なんてつまらねえな」

そう言はなければ男の名に恥じるとも言いたげに貞治はつけ加えるのだった。

「さあさ めしにすべえよ」

立ち上った母の声に忘れていた空腹を一層強く覚えて来た貞治は

「ああ腹がへった」言い乍ら風呂場から洗面器を持って来て土間の真中へおけばお父さんも鉄瓶を持って土間へ下りると

「手を洗ってめしだ めしだ」とうながす。

今泣いた鳥も晴ればれと笑い乍ら立って行くその影法師がすすけた障子にゆら／＼と大きく映ってゆれた。何処かで犬の遠吠えが聞える。

木村先生

分教場には半白の髭を貯えた老先生が住んでいられた。その生活振りは勤めていらつしゃるといふよりは住んでいられると言った方がびつたりするのである。山と山との凹地を流れる川を挟んで両側に立ち並ぶ村の家並よりは一段と高い傾斜に鎮守の森と並んで学校は建てられていた。山を削って整地した敷地は百五十坪もあるだろうか、その北側に建てられた校舎は五十人の児童を収容出来る教室が一つと三坪の職員室に並んで十畳の和室は裁ち物板が五枚並んでいる裁縫室である。巾一間の廊下をぐるっと廻ると便所があり中庭を隔てて小使室と物置に続いて六畳の宿直室がある。此処が老先生參拾余年の住宅であり、小使室はお勝手なのである。隣村の小さな寺の住職の次男坊に生れた先生が分教場の創立と共に赴任された頃は末だ紅顔の美青年であったと年寄りが語るのを聞ければ子供達には領ずけない話である。先生はやつぱり昔からピンとした髭と何でも知っていられる様に落着いた眼を光

らせて威厳を保っていらつしゃったとしか思はれないのだ。先生には三人の子供さんがあってお若い頃は三日に一度は家へ帰られたそうであるけれど子供さんもそれぞれに家を持たれてからは奥さんとお二人で住みついて暮される様になったのである。中庭には鶏小屋もあったし校庭の片隅はいつの間にか野菜畑にもなっていた。子供達は教室も校庭も先生の所有物だと思っていたし、小使室は先生の家の台所だと考えていたから此の家に先生は永久に住まはれる人だと思っていたのに、その先生が引退されて新しい先生が見えるというのであるから子供だけではない大人達にとっても大変な出来事なのである。総理大臣が変わっても選挙法の改正があってもそんな事は少しも村人の話題には上らなかつたけれど此の数日顔さえ見れば先生の話をした。集れば末だ見ない新しい先生を色々に想像して噂する。半年は夢中で働いて残る半年は雪の中に暮して何の変化も刺激もなく老いてゆく人達にとってそれは大きな問題に違いなかった。

老先生の引退ではじめて老を身近に感じた様な心細さに頻りと名残りを惜しむ老人、腕白ないたずらをして罰せられた日の思い出を懐かしそうに語るお父さん達、そしておかみさん達は新しく赴任されるという女の先生の噂を見て来た様に話していた。

「何ていう名の先生だよ」

「そりゃあ木村さんの奥様だつていうから木村先生つていうだつべいよ」

「その人は何でも木村さんが県庁へ行きなされた時に何時でも泊る家の娘さんだちゅう話だぜ」

「へえー それじゃあ なれ合いかな」

「その娘さんがな大層な美人さんでな、木村さんの方が何でも熱が高いだつていう話だよ」

「木村さんだつて仲々いい男前じゃあねえか」

「だからさ、似合いの夫婦だつべいよ」

折角の話題を面白く話さなかつたらつまらないという様に声をひそめたり大きくしたり漬物を食べ乍ら飲むお茶のみ話を賑はせている。四十年近くも変ることのなかつた先生が引退されて都会育ちの女の先生に分教場の教育が引継がれるという事を深く考えるのでもない。ただ何となくそわそわと落着け

ないのが村人の気持だった。

貞治の家でも夕食後の炬端で父と母とが話していた。二人の子供が眠ってからチンチンとたぎる鉄瓶の音を聞き乍ら、

「そんな若い先生がこんな山深い村のくらしに辛棒出来なざるかね」と母親が心配そうに言えは

「東京のえらい金持の育ちだつていう木村さんだつて此の村が好きになつて此の村の人間になりきるんだつて言はれるんだもの、奥様だつてきつと好きになつて居ついてくれべいよ。」と父親

「そうだといいいけれど苦勞が多かろうと思つて……」
 そうあつてほしいと言葉には出さないで心の中に願ひ乍ら此の村の生活のきびしさを思つて話とぎれるのだった。

木村さんとは三年ばかり前から村役場へ勤めていられる史員さんなのである。戸籍係というのが木村さんの仕事なのだけれど村長さんから小使いさんまで入れても総勢七人という世帯だったから若い木村さんは何の仕事にでも引き出されて重宝がられているのだった。部落毎にやる定期の種痘にも受付で親切に世話をしてくれるし、此の村の秋を飾る馬市の準備も計画的にやってくれる。その木村さんが此の村に住みついたのは数年前からだったろうか役場からは一杆程ある温泉部落の賭館の地続きに建てられた十坪余りの小さなしゃれた家が木村さんが一人ぼっちで住む家なのだった。東京のさる実業家の息子として生れたという木村さんは大きな家の中に多勢の使用人に取りまかれて育ち物質的には何の不自由もない恵まれた生活だったけれど生れつき弱い体は少しの事でも熱を出したし、一寸変つた物を食べてもすぐ下痢をするという風だったから小学校へ行く様になつても友達と一諸に遊ぶ事も出来なくて寒い冬の日など欠席することの方が多かった。医者のお蔭で薬の力で漸く生命を保つていたと言つた状態だったから二人の兄さんも相手にしてくれなかつたし、仕事の忙しいお父さんは家族と食事を共にすることさえも少ない程だったから自然自分の部屋の中だけにこもつて暮す子供になつていた。お母さんはそんな弱い木村さんの行く末のことを案じて

「この子には無理に学問も強いまい お金持ちにならなくても立身出世をし

なくてもよい。この子の体力に応じた生活をしていく様に静な田舎の村へでも住ませてやりたい」

と言はれたという。それでも途中で一年休学しながらも漸く中学だけは卒業することの出来た年の夏から胃腸病に効くという此の山の温泉に長期滞在の湯治客となつたのだった。その頃は未だM駅からのバス道路も開けていない峠道を馬の背にゆられて来たという。そんなに遠く家を離れても木村さんは少しも寂しくはなかつた。谷川の石の間から湧き出すお湯は砂を堀り下げて板で囲つた湯舟に流れこみ低い屋根の隙間からは青空を眺める事さえ出来る自然のまま十人余りの湯治客は近郷の百姓ばかりだったから飾らず気取らず話し掛けてくれたし、宿の家族とも四五日ですっかり馴れてずつと前から此処に住んでいた様な錯覚を起すことさえあつた。空を小さく区切つている四囲の山は朝に昼に又夕にも違つた色で呼びかけてくれたし川底まで見透せる谷川の流れの音は直ぐ耳許で聞くことが出来た。何かと言えは病人だから体が弱いのだからと特別扱いにされて育つて来たのだけれど此の温泉宿では誰も病人扱いにする人がなかつた。湯に飽きれば裏山の散歩にも誘つてくれたし、谷川へ糸を垂れて釣も楽しめた。殆んど実費に近い宿泊料で長期に亘つて滞在する人達はお部屋の掃除や廊下のぞうきんがけを手伝うこともあるのだけれど生れてはじめて尻を高く上げて雑布を押して歩いても案ずる程疲れはしなかつた。それでもはじめの中はそんな作業や散歩の後には不安な気持で急いで体温器を入れてみるのだけれど水銀柱は三十六度五分以上は上らなかつた。十日経ち、二十日過ぎる間に自分の体に自信の出来て来た木村さんの表情は別人の様に明るくなって来た。裏山へ向つて腹の底から出した声で「おーい」と呼んで見たら山びこが「おーい」と力強く返してくれたし夏が過ぎる頃には病気を忘れていく日が多くなつた

「東京の医者どんなにいいかげんなことを言つて高い薬を売りつけたもんだなあ。そうじゃあねえか胃が悪いの胸がやられてるのつて木村さんのようない若い者を病人に仕立てちまつて罪なことをするもんだ」

「茸汁の三杯つても吸つて湯へ入つてりゃあじきに達者になれるから」

「みるひとつきりの間にふうつべたへ肉のついて来たことが」

湯治客の中で一番若い木村さんは誰よりも逞ましい壮者の様に言はれると今

まで病気があったことが嘘のように思えて年寄りや病弱な人達を労はり護つてやらなければならぬ立場において考えるのだった。

山の秋は錦を競って名工の秘術によって染め上げた様な裾模様を水鏡に写して川の魚どもを驚かせ乍ら時雨にぬれて老いてゆく。その頃から山村は冬將軍の来襲に備えて戦争の様な忙しさが続いたのであった。東京のお母さんからは

「余り寒くならない中に帰って来る様に」という便りが頻りに来る

「木村さん ツバクロじゃあるめえし 寒いぐれえにたまげて逃げ出すもんがあるもんでねえ」

「おらあこの年になっても此の村で凍え死んだ人の話を聞かぬぞ」

「ここは冬がいいだよ。スキーでもやって一汗かいて来てからさ、山兔のしつぽこ汁でも食った日にゃあ、腹ん中までぬつくなるぞ」

宿の人達からは口々にこんな事を言はれたが日毎に募る寒さにはやつぱり冬を越す自信がなくなつて十月半ばにその年は引き上げたが翌年の春と共に訪れた木村さんはもう冬が来ても雪が降つても逃げ出さなかつた。園芸雑誌や家畜に関する本などを買い込んで来て宿の畑は木村農事試験場と化して秋の農産物品評会には結球白菜が一等に入選した。翌々年には試験場の隅に家が建ちすつかり健康を取り戻した其の頃から月給十七円也の役場史員として独立した木村さんの生活が初められたのだった。それから三年もう木村さんは役場にも村にもなくてはならない人になつてしまつた。そして県庁や郡役所の様な中央への連絡には都会育ちで然も身軽な木村さんが村長代理を言いつけられて出向く事が多いのだったが交通の全く不便な此の村から一年前から漸く一日に四回バスが通る様になつても尚日帰りは無理だったから県庁へ近い常盤屋旅館を定宿としていた。震災で焼けるまでは東京の上野で旅館をしていたという宿の主人は店のお客様以上に親切にしてくれたし長女の芳子さんは東京で育つた日になつかしむ様に話した日から妹の様に仲良くなつていった。

「木村さん、赤城が今とても綺麗よ」

東側の窓を開くと長く曳いた裾を春霞の中にぼかして紫色にけぶつた山の雄姿は美しかった。

「僕は山を唯一の友にして暮しているんだが、こうして離れた処から眺める

山も亦いいね」

窓に腰を掛けてしまつて久し振りに吸う街の空気に郷愁を感じている木村さんの前へ

「すみませんけど ここ一頁だけ一寸訳して下さいませんか？ 四年生になつたら急にむつかしいんですもの」

とリーダーを恐る恐る出す芳子さんに

「僕は学校には縁が浅いからなあ、出来ないかも知れないよ」

そう言い乍ら英語には自信があつた。学校で受ける授業時間よりも家庭で受けた個人教授の時間の方が長かつた木村さんの発音は確かだつたしなめらかなアクセントは気持よかつた。

「もう一度だけ読んでね」

読んで訳し、訳しては読んでくれる声に一つ一つ領ずき乍ら芳子は嬉しくてならなかつた。

「兄さんに宿題手伝っていたいたいのよ」

お友達のような言葉を聞くと兄さんのいる友達が羨ましかつたというよりも小学校の頃によくお母さんが一諸になつて宿題を見て下さつた日の事が思い出されて震災の日逃げ迷つて行方不明になつたままもう五年帰らない母を想つては悲しくなるのだった。三年目に迎えられた若いお母さんとの間にはなじもうと努力すればする程深い溝が出来てしまつてお父さんにまで遠慮勝ちになつてしまつた此の頃では家にいる時間が重苦しくやり切れないのだが気軽に話相手になつてくれる木村さんには兄さんには甘える妹の様に親しんでいった。

「山の温泉でどんなところ」

「こんなところさ」

カバンからいつも離さず持っているスケッチブックを取り出して見せてくれた。

○山の上から写した谷川の流れ

○川原から眺めたつり橋

○僕の家全景

○湯煙

○役場と掲示板

○小学校

○馬と遊ぶ童

巧みな筆で描いた奔放な描写は山村の生活を美しい絵巻にして芳子を喜ばせてくれた

「素てきね！」

感嘆の声をもらし乍ら絵の好きな芳子は夢の様な山の暮しを想像してみるのだった。

暮から正月にかけて一度も姿を見せなかった木村さんが立春を過ぎた頃久し振りに常盤屋の客となった。

「いらっしやい 風邪でも引いて寝込んでいらっしやるのかと思っただよ。」

案じていた息子の帰りを迎える人の様に言ってくれる宿の家族と其の夜は夕食を共にし乍ら、

「芳子さんいよ／＼卒業だね 四月からはお家のお手伝い？」

木村さんが芳子の卒業のことに話をふれると賑やかだった一座は急に黙ってしまった。芳子は何も言はずに下を向いたままで長く編んだお下げ髪の手を指に巻いて遊んでいた。そんな空気の中に居たたまらない様に赤ん坊の泣き出したのを機に若いお母さんは女中部屋の方へ逃れた後で

「困っているんですよ、勤めに出すのもどうかと思っし芳子は家にいるのはいやだっけ言うしね」

本当に困ったという風に頭を抱え込むお父さんに

「一その事僕のお嫁さんに来てしまはないか」

其の場の空気をほぐすように言った冗談から胸が出て芳子さんは本当に木村さんの奥さんとして卒業と同時に山村へ嫁いで来たのだ。そして木村さんの家からは一里離れた分教場の先生として赴任されることになったのである。

昭和四年四月八日 此の日はセーラー服を脱ぎ捨てた芳子さんが木村先生として初めて教壇に立つ日である。分教場の部落では此の日の夜明けは平常よりも三十分は早かったろうか。部落区長さんの家では養蚕の期間とお盆と

お祭以外は開けることのない北側の雨戸までがガタピシと動きの悪い音をたてて開け放たれた。朝の光が縁側を透し薄黒くほこりの積った障子を透して座敷の奥まで明るくした。

「あんまり開けると明るくなつてほこりが目立ってしょうがねえ」

区長さんの奥さんは一人言を言い乍ら箒を伸して天上のくもの巢をちよい／＼と巧に取つてしまつとバリ／＼と威勢のいい音をさせて障子の棧のほこりを払った。此の村にはハタキというものが何処の家にもないのである。街道は小学校の子供が掃き清め校舎の外は青年団の人達が掃除をし町から来る先生を迎える為に村は総出で大童である。

「そろ／＼見える時間だからみんなが昨日の様に並んでくんねえかい」

区長さんは長いクサリのついた懐中時計を覗き乍ら言った。昨日は中村老先生をお送りしたのである。小学校の子供が並ぶだけの間を残して男女の青年団が並びその次にハッピを着た消防団が並ぶとその先へおかみさん達がガヤ／＼と何か言い乍ら一番賑やかに席へ着いた。

「みんななあ鼻をかんで行儀よくお迎えするだよ」

学務委員さんは先生の様に子供に言い聞かせると一番門に近い道の両側へ男の子と女の子を分けて並べた。よそ行の着物を着ている子供達は袖口で鼻をこするわけにもいかずしきりに鼻をすすり上げている。

「わしが其処の曲り角まで行つていて見えたら合図をしますからそれまでは楽にしてい下さい」

区長さんは改った口調で言うと必要以上に両足に力を入れた歩き方で百米程先の曲り角まで忙しげに歩いて行つた。子供も大人も又ガヤ／＼と賑やかになつた列の先頭で学務委員さんだけが区長さんの合図を見守る様に緊張した表情で立っている。

「そうら見えられた様だぞ」

一同が首だけ前へのばして曲り角へ視線を集めた時区長さんに挨拶をしている校長先生の後に若い女の先生の姿がちらりと見えた。木村先生は仰々しい村人の出迎えに一寸驚いた様子でぼつと頬を染めて校長先生の後に隠れる様にして近づいて来た。そしてはにかみ乍らもにこやかに出迎えの人々に応えて大きなコブ／＼の柱で出来た校門をくぐつた。

「きれいだなあ」

「優しそうな人じゃあねえか」

「よさげな先生だぞ」

先づおかみさん達の列から感嘆の声がもれた。紫矢がすりの対の着物に明るい紺サージの袴を胸高につけた長身の芳子の此の日の晴姿は誰の眼にも美しく映った。それでいて希望に輝く眼と優しい口許ははじめて見る村人にも何となく温い親しさを感じさせた。先生に続いて一同は校庭に入り子供を真中にはさんで並びそのまま新形式に移った。校長先生の紹介がすむと木村先生の新任の挨拶があった。

「只今御紹介にあづかりました木村でございます。御縁がありまして皆さんと御一諸に勉強出来ることになりました。どうぞ中村先生と同じ様に仲よく勉強させて下さいお願い致します」

昨日から何回となく頭の中で繰返し練習していた言葉を思いの外落着いて言うことが出来た。その声は美しかった。歯切れの良いきれいな発音は聞く人の耳に快よく響いた。

「女の先生だったらそう怖くはあるまい」と内心いたづらを企らんでいた四年生の男の子も怖くはないが何となくとも叶はない、そんな印象をうけて行儀よくかしまっていた

「お前達はそれではこれまでで今日は帰っていいから明日っから先生のお世話になるだ、おとなしくしねえと駄目だぞ」

教室へ入れて山の子と話をしたいと思っていた木村先生の気持などかまはず学務委員さんは子供を帰してしまった。村人も続いて帰って行った後には数人の役員だけが残って一同は小さな校舎の中へ入った。

「兎に角古いもんだから荒れていてひでえんですがまあたまげねえで下さいまし。其の中に何とか手入れもするつもりでいるんですから」

区長さんが恐縮し乍ら説明するので努めて平静を装はってはいるのだが古びた校舎は想像以上に荒れていて夢に描いた山の分教場とは余りにも違い過ぎた。教室と廊下の境の障子は煤けて硝子窓は破れていた。床板は黒く汚れて教室には蓋のないベビオルガンが一台と国語の掛図、それに壁に貼られた日本地図以外には教具らしいものは一つもなかった。

「どうです勤まりそうですか。若い時にはこんなところの方がかえってやり甲斐があつて楽しいものですよ」

校長先生が耳許で囁く様に言うのに

「はあ、はい」

と慌てて答えた時破れた窓から吹き込んで来た春の風に羽目板に近いところの崩れかけていた壁がザラザラと落ちた。一同の眼は反射的に其処へ向けられたが大急ぎで視線をそらした

「取り敢えず壁紙でも貼るんですね。それに外側の硝子だけは入れていただかないとね」

校長先生が誰にともなく言う

「いやアもうそいだけは今日までにやっておく筈だったんですが――。いや何ともどうも」

学務委員さんは大分伸びた坊主頭を大きな手でかき乍ら助けを求める様に区長さんに横眼で合図をしたので

「そいじゃあ先生わしらがとこでうんまくもねえが蕎麦が出来ている筈だから御苦労でも行つて貰いてえんですが」

「そりゃあどうも、木村さんどうします？」

「どうしますすつちゆう話はねえじゃありませんか。校長先生にゃあ珍らしくもあんめえが木村先生にごちそうのつもりで今朝は暗い中から起きてはあさんがこしらえているだから、わしは先に行つてお膳の支度を急がしとくから皆でお連れ申して下さいよ」

「でも私明日の予定もたてておきたいと思ひますし」

校長先生と学務委員さんの顔とを見比べ乍ら木村先生は遠慮勝ちに言つてみた。二、三日前に本校の校長室で前任の老先生との事務引き継ぎは終つていたけれど明日から現実に子供に接しなければならぬのに何の心の準備も出来ていないことは心細くて不安だったからだ

「先生そんなに初めての日から稼いだがらねえでも今日ゆっくり色の黒い蕎麦でも食つて貰つて村の話でも聞いて下さい」

「そうだとく、百姓がこしらえた手打ちの蕎麦も案外うんめえもんでこ

ございますよ」

皆から口々にそう言はれては強く辞退することも出来なくて村人の後に従って学校を出た。

区長さんの家は学校から鎮守の森を一つ隔てた隣りの古い大きな家だった。

「まあよくおいで下さいました。穢いところですがさあさあ」

人の良さそうな奥さんは愛想よく迎えてくれた。一同は床の間のある奥の座敷に通された。席が決ると酒が運ばれて一座は急に賑やかになったがそうした席の空気に全く馴れていない木村先生は校長先生と並んで上座に座らされて迷惑そうにおし黙っていたが酒が廻ると話題は自然老先生の上にとんで腕白だったこと叱られたことを懐かしくてたまらない様にかはる／＼話し出して木村先生も何時の間には話の中へ引き込まれて一語になって笑っていた。

「中村先生を送ってしまったって昨夜は一晚中何だか村中が寂しくってたまらなかつたけれど今日は又こんな若い奇麗な先生をお迎え出来たんでほんとによかつた」

とも言った。老先生は村を去っても村人の心の中に何時までも生きていると思うと一度だけ会ったあの老先生の後をうけてあの校舎を愛しあの子供達と仲良く暮して行こうと思うまでに自然に心がほぐれてくるが木村先生自身にも嬉しく思はれた。

「器量は悪いけれども味はいいだよ」

そんなことを言つて差出された生蕎麦はおいしかった。仄かな蕎麦の香りが嬉しくて勤められるままにおかはりまでした。

「蕎麦が好きじゃあ俺が村の先生になって貰える。町の先生は食物まで違つたっぺいと思つて心配したけれどよかつたよかつた」

村人は本気でそんなことを言つて喜んだ

「先生は蕎麦が好きだよ」

その日の中に隣から隣へと村中の人にそう伝えられたのである。

やらなければならぬ事が沢山あり過ぎて木村先生は何から先に手を出して良いのかわからない程だったけれど先づ費用がかからなくて出来る床洗いを始めることにした。

「明日は床洗いをしましょう。三、四年の人達は縄のたわしを持って来て下さい」

先生の言いつけに翌日は手に自分で作った大小様々なたわしを持ち寄つて来た。一、二年の小さい人は帰してから机も腰掛も教壇まで片隅に寄せてたわしを持った子供をぎやうをぎやうに並べた。背の高い男の子五人は水運びを受持たせた。先生も着物を女学校時代の体操服に着替えて素足になって水をまき散らした。驚いて見ていた子供の中で級長の貞治が聞いた。

「先生も掃除やるんですか？」

「ええ、みんなできれいにしましょうね。さ、何か皆知っている歌を唱い乍ら揃つて擦ると疲れなくなつてよ」

「ワアーうれしいなあ／＼」

「お手々つないでいい」

「何でもいいわ揃つてよ、はい一、二、三」

お手々つないで野道を行けば

みんな可愛い小鳥になって

歌を唱えば靴がなる

晴れたみ空に靴がなる

どの子の顔も明るく輝いて歌う度にたわしを持った小さな手が右に左にと調子よく動く。先生が一語ぎやうになつて掃除する、そんなことは今まで考えたこともないことだったのだ。

「はい止めて——皆立つてごらん小さい汚れた水を流しますよ」

運ばれて来た水をさあつと流すと白くなつた床板が現れる。

「ワイーきれいなつたぞ」

「新しくなつたぞ」

学校の床板というのは真黒いものと思つていたのにこんなに白くきれいになつた。然も自分達の此の手で磨いたからだと思つと一枚の床板までがいておしく思はれて未だ濡れている木の肌にさわつてみている者もいる。

「さあ又並んでね」

次々に新しい床板が現れて行つた

「先生、釣瓶がはづれちゃいました」

その時水運びの子供が窓の外で呼んでいる

「え、つるべが」

木村先生は少し上ずった震えた声で窓から顔を出した。職員室の前の井戸は昨日覗いたら一丈余りの深さがあって暗い底の方に水の輪が光って見えた。太い縄の両端に二つの桶がついていて滑車によって吸み上げる仕組みになっていた。大人の腰位な高さの井戸枠から覗くのさえ木村先生には怖いと思われたのに子供等は馴れた手付で一年生までが一人で吸み上げてその水で手足も洗えば飲みもする。見ていてハラ／＼させられたが

「先生心配することあねえですよ、子供はなれているだから」

村の人々は安心してきつた調子でそう言うのであるべく見ない様にしていたのにその釣瓶がはずれることがあるとは初めて知ったのだ

「まあそんな時今まではどうしていたの？」

「先生がかけてくれた」

「俺達がかけると危ねいからって先生が怒るだもんな」

「そりゃあそうよ危ないわ」

先生は素足のままで井戸端まで行って見た。子供もそろ／＼と後からついて来た。成程太い縄は車からはずれて心棒にひっかかっている。

「此の上に先生が登っていつでも掛けてくれたんです」

貞治が井戸枠を指し乍ら言った。掛けてみよう、そう思ったけれど一寸中を覗いたらそれだけで眼がくらく／＼した。

「先生俺かけらいるよ」

八郎がにこ／＼と言った。

「だってとても危いわ」

「大丈夫だよ先生、おれんちの井戸なんかもっと深くって年中はずれるから馴れてるもん」

一層得意そうに言うともうする／＼と井戸枠に登ってしまったではないか

「それでは先生が八郎さんの体をしっかりとつかまえているから気をつけてやってね」

先生は両足を開いて力を入れると必死に八郎の体を抱いた。

「そうら出来た」

見る間に綱は又車の溝にかえっていた。

「あ、よかった」

額に吹き出した汗を拭いても末だ心臓はドキ／＼となっていた。

町へ出掛ける日の木村さんに頼んで自分のお小遣いで壁紙や模造紙を買って来て貰うと壁が落ちかけているところだけ紙を貼った。五十音図や数図もかいて貼ると部屋の中が半分整って来た。硝子窓の破れも何時になったら入れて貰えるという当もないので寒くなるまではそのままの方がよいかと思ったが窓枠だけの戸は気になってならないので此処へも模造紙をはって四隅を小さな釘でおさえた。

「先生みんなはつまりましたか」

「穴が一つもなくなっちゃったんじゃないか」

先生が放課後遅くまでかかって一人で穴を塞いだのに翌朝登校して来た子供達は不服そうに言うのである

「あらいけなかったの？ ガラスは何時入れていただけのかわからないからしばらく紙の窓がまんじましようよ」

「だけど穴がなくなっちゃったたらツバクロが入って来られねえと思って」

そう言う子供等の眼は一斉に教室の天井に注がれた。そこには去年のツバメの巣が残っていてそのあたりは糞の為に白く汚れている。これも此の間から気になって何か踏台をして取除いてしまおうと思っていたものだったのである

「まあこれツバメの巣だったのね、それじゃあ夏になると去年のツバメが帰ってくるの」

「……………」

子供等は黙って大きく頷いてみせた

「そうだったの そうだったの それじゃあ一つだけ窓を開けといてあげましょうね」

言い乍らはったばかりの紙をはぎ取って真中の一番ツバメが入り易そうな位置の窓を開いてやった。子供達は安心して様になつて笑って又黙って一つ大きく頷いた。そしてその日から古びた教室の天井へ南の国の新しい夢の

せてツバメの訪れる日が楽しみに待たれてならないのだった。

その頃ツバメより先に毎日教室の窓の下へ来てはじつと教室の声に耳を傾けている女の子があった。雨の降る日には傘をさしてまで来て窓の下から背のびをして先生の声を聞いている

「あなたどこの子」

木村先生は窓から顔を出して優しく聞いてやった。女の子は嬉しそうになつこりしたがすぐ恥ずかしそうに下を向いた

「貞んこの雪子だよ」

八郎が又得意そうに答えると皆が窓から顔を出して「雪子だ雪子だ」口々にそう言ったので一層恥づかしそうに傘をつぼめてその中へ上半身を隠してしまつた

「雪子まだいたんか 雨が降るから家へ帰つてろな」

貞治も少し顔を赤らめ乍らなだめる様に優しく言つた。雪子にはそれには答えないうで傘の中に体を隠したまま長靴の音をさせて一人で帰つて行つた。

「貞治さん妹さんはいつから学校？」

「来年です」

「学校が好きで来てみたいんじゃないの」

「此の間までは学校は嫌いだって言つてたくせに先生が来られてっからは来たがつてしょうがねえんです」

「そうなの、それだったら明日つから教室へ入れてお上げなさい」

その翌日から雪子は一年の列の空いた机を与えられてお父さんに町から赤いカバンも買って来てもらった。その中へ石盤も貞治のお古の教科書も入れて一年生と同じ様に一日も休まず喜んで通つて来た。一番小さいんだからと先生も子供達もみんな可愛がつてやつた。

夏も過ぎて秋も逝つて木村先生は分教場の生活にも村の暮しにもすっかり馴れて釣瓶の縄がはずれても驚かない様になつていた。

これまでは教科書以外の本などは読んだことのない分教場の子供に先生は毎月お小遣いをさいて小学館の学習雑誌をとつてくれたし校庭の葉桜の蔭で話してくれた美しい童話は子供のもつ夢の世界を広く豊にしてくれた。

そして三学期も終り近い三月のひな祭には村の人達をお招きして学芸会をやることになった。その為の予算など勿論取つてある筈もないけれど先生は模造紙を貼ぎ合はせてそれに背景を描き画用紙を切り抜いて冠を作つた。劇と唱歌とおゆうぎのどれかには誰もが必ず出られる様に一人残らずステージを踏ませてやろうと苦心した。子供達の喜び様は大変なもので夕方遅くまで残つては先生の指導がなくても自分達で工夫しては練習する程だった。それだから誰か一人休んでも困るので

「みんな風邪をひかねえ様にして休みっこなしだよ」

と約束したのもうひな祭も近い二月も末の頃から二人三人五人と風邪ひきが出て次々と十人以上も休む様になつてしまつた。そして二、三日では出て来られそうもなくて折角楽しみにしていた学芸会を四分の一近い子供が欠席のままではすることも出来ないのでお彼岸まで延すことにして其の事を報告旁々三日前から休んでいる良子も見舞つてやりたいと思つて学務委員さんのお宅を訪ねると御主人はお留守で奥さんが炬端で藁草履をつくつていた。

「良子ちゃんやつぱりお風邪ですか」

「ああ ありがとうございます。おらがとこの良子は小さい時から風邪の神とは仲良しでしょうがねえですよ今年だつてはあ二回目だから」

「それでどんな様子ですか」

「今年の風邪はどうも性質がよくねえらしくって馬鹿に喉を痛がるし熱もあるだつてい食物を食いたがらねえで弱るですよ。風邪ぐれえ大食をすればなおるだつて言うだけえど」

「お医者さんに見せた方がよろしいんじゃないありませんか」

「ああ なあにそんなに心配することもねえだよ。子供の風邪ぐれえで医者騒ぎも出来ねえと思つて。人に笑はいるから」

良子の母親は本当に大して心配している様子はなかった。

「良子先生がおいでしてくれたぜ 着物をうんと着て起きて来ねえか」

先生にお茶をいれておいて母親は奥の部屋へ声をかけた。やがて線入れに着ぶくれた良子が熱っぽい顔で起きて来た。

「それにんにははをしねえで」

母親に言はれて恥づかしそうに挨拶すると

「先生学芸会は？」

休んでいてもそれだけが気がかりで熱をおしても学校へ行ったのであ
る。良子は羽衣の劇で天女の役を振り当てられ返してもらった羽衣をつけて
美しく舞い乍ら天へ上って行くところを演ずるのが嬉しくて得意だったの
だ。

「獵師一人では劇にならないでしょう。だから良子ちゃん達みんながおつ
て来るまで延ばすことにしたのよ。早くなおつていらっしやいね」

「よかったなあ飯をたんと食って風邪の神ぐれえ追い出すだよ」

良子は嬉しそうに何回も頷いた。

「熱が大分あるんじやありませんの」

言い乍らそつと額へ手をやつみると小さな体はカッカツとほてる様に熱かつ
た。木村先生はこれはただの風邪ではないと直感したのである。

「一寸お口を大きく開けてごらんさい」

窓の方を向かせて口を開いた良子の喉は肥大した扁桃腺で塞がれその表面に
は白い斑点が一面に出来ているではないか。

「喉が痛いでしょう」

大きく口を開けた為に出た涙を拭き乍ら良子は悲しげに頷いた。

これはただの風邪ではない。女学校時代生理衛生で学んだ伝染病の中のジフ
テリアの症状と全く同じではないか。

「起きていてはいけないわ。温くして寝ていらっしやい」

急いで良子を寝かせてから

「お母さんただの風邪ではない様ですからお医者さんにみせた方がよろしい
んじやあございませんか」

「なあに先生今年の風邪はみんな喉が痛いらしいだよ あつちる（案じる）
こともあんめえ」

母親は笑って取り合おうとしない。

「お母さん私はお医者さんではないから確かなことはわかりませんけれどヂ
フテリアの症状とよく似ているから心配なんですのあれは伝染病ですから弟
さんに感染してもいけませんし一度診察を受けた方が安心だと思えますが」
「伝染病だなんて先生とんでもねえ。心配して下さるのはいいけれどあんま

りつまらねえことは言はねえでくんねえかい」

お母さんは急に不機嫌にもうそれ以上は言はせないぞと言はぬばかりの見幕
で追い立てられる様に表へ出た先生の顔は暗かった。その足で他の子供を五
人見舞ったが三人までが同じ様にジフテリアの症状が見えたがどの親も取
り合はず

「おらが家から伝染病なんかが出てたまるもんじやあねえ」

まるで一家の名譽を毀損されたかの様に怒り出す人さえあつた。それでも
放つてはおけないと思つたので役場へ行って木村さんに話し二人で村長さん
にも訴え校長先生にも話したのだが

「まあまあ余り騒がない方がいいでしょう」

笑いにごまかして少しも本気にはなつてくれなかつた。そして大騒ぎになつ
たのは病氣を案ずる気持ではなくて「医者でもねえのに人の子に伝染病だ
なんてケチをつけた」と木村先生を非難する声だったのである

「あんな先生を分教場へおかれたじゃあしょうがねえ。だから若い女の先生
なんかよこされたじゃあ困るって初めっから言つたことだ。四月の切りかえ
にやあどうしても取りかえて貰はなくちゃあならねえ」

その翌日夜明けを待つて学務委員さんと区長さんは校長住宅を襲つての強硬
な談判だったのである。昨日までのいい先生は一夜にして生意気な女となり
下つたのである。其の日校長先生に呼び出された木村先生は軽卒な行為だと
強くなじられたけれど子供の病氣を案じて医者にみてもらうことを勧めたの
が何でそんなに村人のげきりんを買い職場を追はれる程責められなければな
らないのか全く理解出来ないことだつた。

「いい人程怒り易いんだよ。然し怒られても誠意をもって言つてやつたこと
は言はないよりはよかつたと思うね。」

木村さんは静にそう言つたけれど純粹な木村先生の気持は口惜しさに震えて
「四月からと言はず今日からだつて行つてやるものか」と一里の道を歩いて
行く気力も失せてしまった程だつたが

「子供が待つているんじやあないの」

木村さんに言葉少なにそう言はれると罪のない五十人の子供の顔を思い出し
て重い気持で出勤した。いつもより三十分も遅い先生を心配して雪の降る冷

たい朝なのに皆で校門のところまで出て来て先生の見えるのを待ち詫びていた子供等は

「先生だ」

「先生だ」

一斉に走り出して来て動きがとれない程幾重にもとりまいてしまったではないか。木村先生は色々な感情が入りまじって涙が溢れて来ても両手をとられてふくことも出来ず「ごめんね〜」謝り乍ら泣き笑いの表情で教室へ入った。

一週間後に良子は死んだ。死ぬ直前に初めて医者に見せたが医者はデフテリヤだとは言はなかった風邪をこじらせて肺炎を起したのだと両親は皆に強調して話していたという。

けれども幸に犠牲者は普段から体質の弱い良子一人を出しただけで済んだ

お彼岸の中日に漸く出揃った子供等が父兄を招いて開いた学芸会にも学務委員さんは顔を見せなかった。天人は代役がとめて狷師から返して貰った羽衣を着けて舞っている姿を舞台の横から眺めていた木村先生の眼には良子の姿と二重映しになってそれも次第に霞んで涙に曇った眼には何も見えなくなった。

何時までも分教場を愛していこうと努力して来た木村先生の願いは心ない人々の手でぶつつりと断ち切られて四月から本校勤務にかはることに決定した

四 「春駒」の推敲過程 (一)

前節には、未発表草稿「春駒」の現存稿一三三枚のうち六六枚目まで(宮川ひろの付した「春駒」本文のページ数「No.63」まで)の本文の最終形態を示した。この最終形態に至るまでに、数回の手入れが行われた様子が原稿からは見て取れる。手入れを行った筆記具の見分けは難しいが、清書時のインクの色を確認したうえで、手入れのインクがそれと同じかどうかを判断して、推敲過程を以下に記す。複数の筆記具を用いていると認められる場合は、使用されているインクに番号を付し、どのインクによる手入れかわかるよう

にする。推敲過程の提示の仕方は、『新校本宮澤賢治全集(筑摩書房)の「校異篇」を参考にして、次のようにした。

○ 前節に提示した本文の、相当する箇所(ページ数・行数)を示す。ページ数は、各ページの左下方または右下方に付された漢数字のものを示した。行数は、章題や行あき等も数えて示した。

○ 推敲箇所の直前直後の必要最低限の本文を引用し、手入れを行っているところを括弧「」で括って示す。括弧「」の中には、まず清書時の最初の形態を記し、そのあとに「↓」で推敲後の最終形態を示す。その際、どのインクによる推敲なのかわかるようにする。

○ インクの色は、項目ごとに①②③等の記号を付して示す。

○ 推敲過程の提示の仕方は次の通りである。

・「三↓④」は、最初は「三」と記していたところを、④の筆記具による手入れで「四」に修正したことを表す。

・「(ナシ) ↓ ①いたし」は、最初はなかった言葉「いたし」を、①の筆記具によって推敲時に書き加えた、という意味になる。

・「力強い ↓ ②(ナシ)」は、最初は「力強い」とあったが、②の筆記具でこれを削除したことを表す。

・「(一字アキ) ↓ ③頬」は、最初は一字空欄だったところに、③の筆記具で「頬」の字を書き加えた、という意味になる。

(一)「表紙」の推敲過程

清書時のインクは、ブルーブラック。推敲はなし。

(二)「梗概」の推敲過程

清書時のインクは、ブルーブラック。推敲は、同じインクで行われた次の一箇所のみ。

一六頁上段12行目 若い生命を「奮 ↓ 奮」う戦争

(三)「目次」の推敲過程

清書時のインクは、ブルーブラック。推敲はなし。

- 一八頁下段28行目 燃えそうもない程「大きな ↓ ㉑ 太い」桑の木の根っこが一つ「だけ ↓ ㉑ (ナシ)」転がっているだけだった。
- 一九頁上段20行目 煮メの臭いに食欲「を ↓ ㉑」をかきたてられて
- 一九頁上段24行目 家を目当てにして「は ↓ ㉑ (ナシ)」品物を仕入れて来て
- 一九頁下段6行目 雪が降って「だから ↓ ㉑ いて」春駒の出て来る陽気に
- 一九頁下段14行目 さつきから考え「た ↓ ㉑ て」いたらしいお母さんは
- 一九頁下段22行目 女の子でも四大節の式の時「で ↓ ㉑ に」も袴をつけている者は
- 一九頁下段30行目 父親の側へ「(ナシ) ↓ ㉑ い」ざり寄る様にして二度も念をおす
- 二〇頁上段4行目 はじめて気が「はじめて気が ↓ ㉑ (ナシ)」ついたお母さんが
- 二〇頁上段11行目 学校「の ↓ ㉑ が」き「ら ↓ ㉑ れ」い「な子 ↓ ㉑ だ」なんて馬鹿の子
- 二〇頁上段16行目 小使いさんがいな「い ↓ ㉑ くて」もう五十を越した男の先生が
- 二〇頁上段25行目 みんな教室へはい「ると ↓ ㉑ って」一瞬静になった時
- 二〇頁上段28行目 片手の上のせられる「(ナシ) ↓ ㉑ 程の」可愛い雪だるまに
- 二〇頁下段8行目 何も言はれなかったので「徳一は ↓ ㉑ (ナシ)」救はれた様に席へ着くと教科「(ナシ) ↓ ㉑ 書」を出して屏風の様にたて「ると ↓ ㉑ 、」その陰に「(ナシ) ↓ ㉑ 懐の」雪だるまを出してそっと置いた
- 二〇頁下段17行目 もぎ取る様にして「(ナシ) ↓ ㉑ 取上げると」雪の中へ力一ぱい
- 二〇頁下段23行目 折角作った「(ナシ) ↓ ㉑ 可愛い」雪だるまを投げ

つけて

- 二〇頁下段29行目 悪いことをしなけりゃあ先生だ「と ↓ ㉑ って」
- 二二頁上段12行目 洗面器を持って来て土間の真中へお「くと ↓ ㉑ けば」お父さんも鉄瓶を持って土間へ下り「た ↓ ㉑ る」と

(五)「春駒」本文第二章「木村先生」の推敲過程

清書時のインクは、暗い色のブルーブラックインク。推敲は、清書時と清書後に行われたとみられ、清書後の推敲時には鉛筆とブルーブラックインクを使用している。

ブルーブラックインクを㉑、鉛筆を㉑、鉛筆による手入れをブルーブラックインクでなぞったものを㉑㉑として、以下に推敲過程を示す。推敲の順序は、原則として㉑、㉑、㉑㉑の順であろう。

なお、原稿用紙三九枚目、「No.36」の左側枠外に、鉛筆で次の書き込みがある(□は判読不可能な文字)。

震災という全く予期しないわざわいのために何の前ぶれもなく突然母を失ってしまった芳子の胸には亡き母の映像が□日と共に消えがたく「なつかし ↓ (ナシ)」刻まれて新しいお母さんの前へ出るとどうしても素直に振舞うことが

- 二二頁上段21行目 村の家並よりは一段と高い「(ナシ) ↓ ㉑ 傾」斜に
- 二二頁上段26行目 小使室と物置に続いて「職員住宅 ↓ ㉑ 六畳の宿」直室がある
- 二二頁下段1行目 先生には三人の子供さん「も ↓ ㉑ ㉑」あって
- 二二頁下段2行目 家へ帰られたそうであるけれど「三人のお ↓ ㉑ (ナシ)」子「(ナシ) ↓ ㉑ ㉑」さんもそれぞれに
- 二二頁下段28行目 漬物を食べ乍ら飲むお茶のみ話「に残り少なくなった農閑期を惜しむ様に ↓ ㉑ ㉑ (ナシ)」を賑はせている
- 二二頁上段5行目 と「(ナシ) ↓ ㉑ ㉑ 母親が」心配そうに言えば
- 二二頁上段10行目 そうあってほしいと「心 ↓ ㉑ ㉑ (ナシ)」は言葉には出さないで

二二頁上段18行目 此の村に住みついたのは数〔(ナシ) ↓ (a)年〕前から
 だったろうか

二二頁上段25行目 寒い冬の日など欠席することの方が多〔い程だった
 ↓ (a)かった〕

二二頁下段8行目 板で囲った湯舟に流れ〔こんで ↓ (a)こみ〕

二二頁下段9行目 十人余りの湯治客は〔(ナシ) ↓ (a)近郷の百姓ばかり
 だったから〕飾らず気取らず話し掛けてくれたし

二二頁下段23行目 「おーい」と呼んで見たら〔力強い ↓ (a) (ナシ)〕
 山びこが

二三頁上段3行目 名工の秘術によって染め上げた様〔(ナシ) ↓ (a)な〕
 裾模様を水鏡に写して

二三頁上段7行目 ツバクロじゃあるめえし 寒〔いぐ ↓ (a)い〕ぐれ
 えにたまげて逃げ出すもんがあるもんでねえ

二三頁下段4行目 ここ一頁だけ一寸訳して下さ〔ん ↓ (a)い〕ません？

二三頁下段6行目 とリーダ〔を ↓ (a)ー〕を恐る恐る出す芳子さんに

二三頁下段12行目 「傍らで聞き乍ら ↓ (a) (ナシ)」読んでは訳し、訳し
 ては読〔む ↓ (a)んでくれる〕声の一つ一つ領うなずき乍ら芳子は嬉しくて
 ならなかった

二三頁下段20行目 やり切れな〔かったから ↓ (a)い〕のだったが

二三頁下段21行目 木村さんには兄さん〔と ↓ (b) (a)に甘える〕妹の様に
 親しんでいた

二四頁上段7行目 絵の好きな〔好 ↓ (a)芳〕子は夢の様な山の暮しを想
 像してみるのだった

二四頁上段14行目 「案じ ↓ (a) (ナシ)」案じていた息子の帰りを迎える
 〔(ナシ) ↓ (b) (a)人の〕様に言ってくれる宿の家族と〔共に ↓ (b) (ナ
 シ)〕其の夜〔を ↓ (a)は〕夕食を〔とつて ↓ (b) (a)共にし乍ら〕、

二四頁上段16行目 「芳子さんもいよく卒業だね 〔(ナシ) ↓ (b) (a)四月
 からは〕お家のお手伝い？」

二四頁上段17行目 賑やかだった一座は急に黙ってしまった〔下を向いて
 ↓ (b) (a) (ナシ)〕 芳子は何も言はずに〔(ナシ) ↓ (b) (a)下を向いたままで〕

長く編んだお下げ髪のを指に巻いても遊んでいた

二四頁上段28行目 昭和〔三 ↓ (a)四〕年四〔八 ↓ (a)月〕八日

二四頁下段2行目 朝の光が縁側を〔通 ↓ (a)透〕し薄黒くほこりの積つ
 た障子を〔通 ↓ (a)透〕して座敷の奥まで明るくした

二四頁下段16行目 男の子と女の子を分けて並〔げ ↓ (a)べ〕た

二四頁下段26行目 区長さん〔の ↓ (a)に〕挨拶をしている校長先生の後に

二五頁下段24行目 校長先生と〔木村先生 ↓ (a)学務委員〕さんの顔とを
 見比べ乍ら

二六頁上段9行目 迷惑そうにおし黙っていた〔が ↓ (a)。 ↓ (a)が〕酒が
 廻ると

二六頁上段20行目 〔灰 ↓ (a)灰〕かな蕎麦の香りが嬉しくて
 二六頁下段26行目 磨いたからだと思うと〔(二字不明) ↓ (a)一〕枚の床
 板までが

二七頁上段4行目 暗い底の方に水の輪が光って見〔(ナシ) ↓ (a)え〕た

二七頁下段15行目 わからないから〔それま ↓ (a)しばら〕く紙の窓で

二八頁上段29行目 お小遣いをさいて小学〔校 ↓ (a)館〕の学習〔態度 ↓
 (a)雑誌〕をとってくれた

二八頁下段10行目 出て来られそうもな〔いので ↓ (a)くて〕折角楽しみ
 にしていた

二九頁上段24行目 今年の風邪はみんな喉〔い ↓ (a)が痛い〕らしいだよ

二九頁上段28行目 よく似ているから〔とても ↓ (a) (ナシ)〕心配なん
 ですよ

*

以上、本稿では、宮川ひろの未発表作品「春駒」について、宮川ひろ自身
 の発言と現存稿の状態の確認をしたうえで、原稿全一三三枚中六六枚目まで
 (作品第二章まで)の本文紹介を行うとともに、推敲過程を明らかにした。
 続稿(二)では、現存稿の後半を取り上げ、作品三章以降の本文紹介と推敲
 過程の検討を行いたい。そして、未発表作品「春駒」の持つ意味の考察へと
 進んでいきたいと思う。

注

- (1) 中地文・大木葉子「宮川ひろの児童文学と教育―宮川健郎氏に聞く―」(『宮城教育大学紀要』第五五巻、二〇二一年一月)
- (2) 二〇二一年九月二五日、東京都国分寺市の宮川健郎氏のご自宅で、草稿「春駒」を拝見した。
- (3) 宮川ひろの草稿「春駒」は、東京都豊島区が企画・制作した映像作品『坪田譲治との出会いからはじまった宮川ひろの作家人生』(二〇二〇年)のためのインタビューを宮川ひろが受けた時、ひろ自身によって話の材料として提供され、画像撮影も行われた。その際の撮影資料をまとめた箱に、現在おさまられて保管されている。原稿の束を紙で包んで箱に入れたのは、映像作品作成担当者と思われるが、原稿用紙を綴じてまとめたのは宮川ひろ自身である。

【謝辞】宮川ひろの未発表作品「春駒」の現存稿の調査・紹介についてご許可くださり、現存稿および壺井栄書簡ほか関連資料の確認に際して格別のご配慮を賜りました宮川健郎氏とご家族のご厚意に、心より感謝し御礼申し上げます。

(令和三年九月三〇日受理)

“Harukoma”: The Unpublished Work by MIYAKAWA Hiro (1)

NAKACHI Aya and OKI YoKo

Abstract

MIYAKAWA Hiro, a contemporary Japanese children's literature writer, said that before the publication of her masterpiece *Harukoma no Uta*, she had repeatedly written on the same subject. This time, I had the opportunity to check the manuscript of “Harukoma,” an unpublished work that is believed to be the first work leading to *Harukoma no Uta*. This manuscript is in the custody of Mr. MIYAKAWA Takeo, son of MIYAKAWA Hiro. In this paper, after confirming what MIYAKAWA Hiro said about “Harukoma” and the condition of the existing manuscript, I have transcribed the text of the first 66 pages (up to the second chapter of the work) out of 133 pages, and clarified the process of revision.

Key words : MIYAKAWA Hiro, Children's Literature, “Harukoma”,
Harukoma no Uta